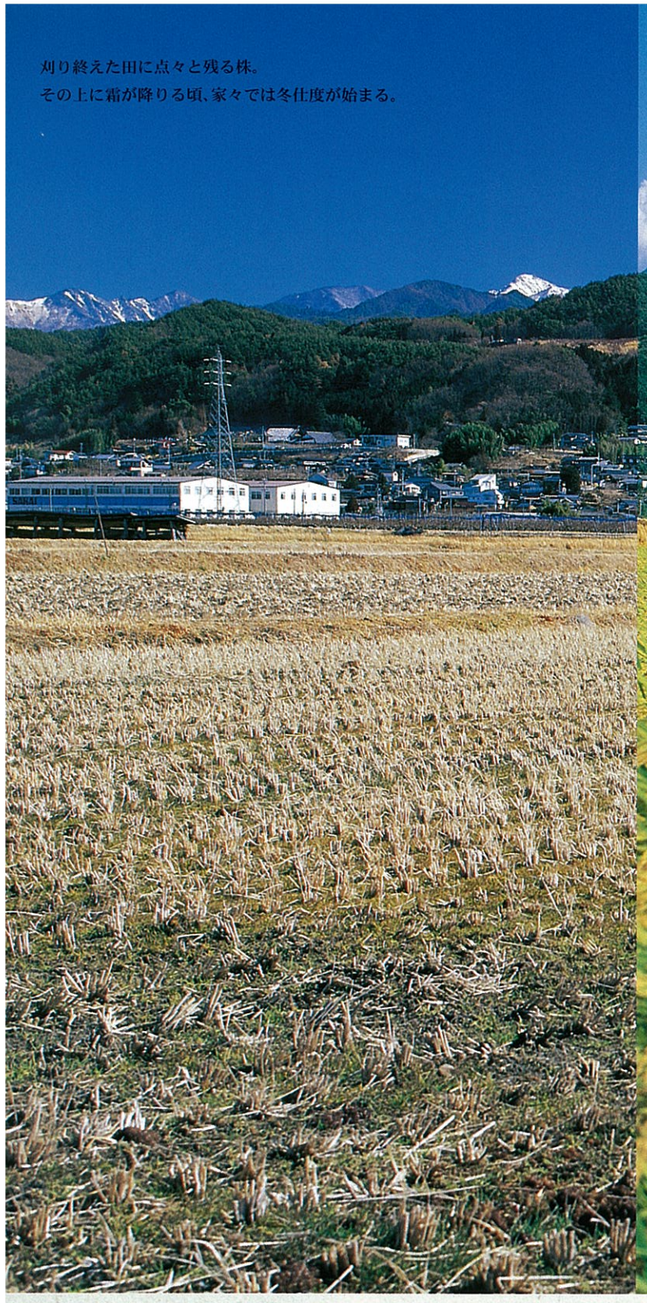
豊丘村村勢要覧



刈り終えた田に点々と残る株。
その上に霜が降りる頃、家々では冬仕度が始まる。

太陽の行路が大きく南へ移動する頃、田んぼには黄金色の波がたつ。
重く穂をもたげた稲は収穫の時を迎える。
遠く弥生時代から米は日本人の重要な糧であった。
米の実りの季節ほど人々の心を豊かにする景色は他にはないのかもしれない。

整然と植えられた苗が日ごとに青さを増してゆく。
風渡る―稲葉の間を吹き抜ける風が、初夏の匂いを運んでくる。
腰のあたりまで伸びた稲の間から立ちのぼる草いきれ
―強い陽射しを浴びて成長する稲。

はるかに望むアルプスの峰々から雪が消える頃、里では田おこしが始まる。
代かきを終え、水が湛えられた田を丘の上から見下ろすと、
伊那谷全体が雪解けの水を蓄える巨大な水瓶となっている様が見てとれる。

豊丘を語る

藤木　三千人

本学セミナーハウスから神稲地区北側、河野地区の中段から下段が一望できます。天竜川を挟んだ中央アルプスを望むその景色は、中山間地域にある人々の生活に様々な恵みを与えて包み込むような温かさを感じさせてくれます。

下伊那地域の人々の暮らしでは、養蚕から果樹、野菜栽培、畜産といった農業産品の変遷が重要となっています。農業立村を標榜されている豊丘村にありましては、農業従事者の高齢化の問題は大きく、その対応が最大の課題であることは自明のことでありますが、役場を中心とした豊丘村民の英知と努力が必ずや報われることと思っております。農業を取り巻く様々な国策への対応には役場、農協を中心として各地区毎の営農への主体的な取り組みがあり、また商工業につきましても農業生産者と手を携えての発展に向けた活動が大きく貢献をされるものと思われます。近年の村人口の微増傾向は若年層の定着を意味しており、また村外の他市町村との繋がりが村の生活の新しい側面を醸成してくれる良い機会となっていくことと思います。

天竜川河岸段丘の下段中段そして山間地域に大別される村の地勢の中で村民の皆様は、各地域の特性を生かした生活を営みつつ、豊丘村として全域の村民生活の維持発展に向けた活動が活発に行われ、且つその活動が全戸に即座に周知されていることに双方向の村政への可能性の大きさを感じています。

こうした活動は、様々な年齢性別に亘った村民の方々の活動の活性化に繋がってきているものと見受けられます。人口の高齢化が進む中で自然と共生する生活の場に富んだ豊丘村民皆様の大地にしっかりと足の着いた生活に裏打ちされた活動が村内外に存在感を持って示され、村民生活の維持発展に向けられた皆様の活動が益々進展されることを祈念しております。

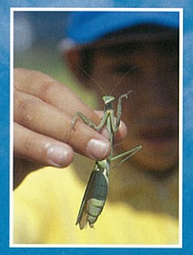
藤木　三千人
1929年兵庫県生まれ。
東洋大学卒業後、東北大学講師を務め、1959年に母校東洋大学へ移籍。
年に数回は豊丘村を訪れ、セミナーハウスで過ごす。

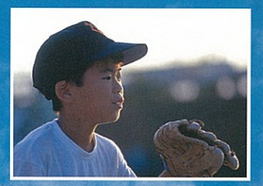
村民憲章

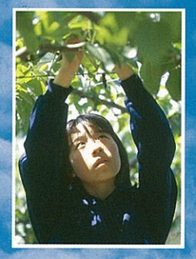
一、緑と清流を、
　こよなく愛する村にしましょう。
一、教育を重んじ、文化のかおり高い、
　平和な村にしましょう。
一、産業をおこし、若い力を育て、
　活力ある村にしましょう。
一、あいさつをかわし、
　明るい家庭をつくり、
　住みよい村にしましょう。

昭和60年11月9日制定

Photo message







次代の担い手たち

Contents

●P2／P3　次代の担い手たち　Contents

●P4／P5　豊丘の風土　Nature of Toyooka

●P6／P7　豊丘の暮らし　Life style of Toyooka

●P8／P9　次代の村づくり　Make a plan in the future

●P10／P11　ふるさと・豊丘村に寄せる思い　Thinking of Toyooka

●P12／P13　活力ある産業づくり　Make a plan for vital industry

●P14／P15　豊丘・誇りと喜びづくり　Pride of Toyooka and Joy-making

●P16／P17　明日を拓く人づくり　Make a plan for Human-resource and Relationship

●P18／P19　住みよいむらづくり　Make a plan for Amenities of village life

●P20／P21　新世紀に問う…豊かさとは　What is Abundance? … for new Millennium

豊丘の輪が、和となって拡がるように

目　次

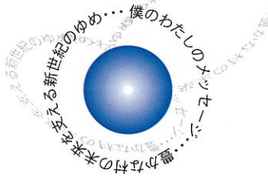


Photo message

豊丘の風土

ここは、野田平キャンプ場につづく虻川渓谷の上流。
清冽な流れは青空と緑の葉影を映し出し、水底からは光が湧き上がってくる。
降り注いだ雨を集めて流れる川は幾多の生命を育み、
やがて、大いなる天竜に合する。

NATURE GROUND TOYOOKA

人はみな心の内側に、原風景と呼べる景色を抱いているものだ。何気ない農村の風景にやすらぎを感じるのは、それが、日本人の多くに共通する想いとして心に刻まれているからなのだろう。

豊丘が訪れる人々の心をなごませ、包み込んでくれるのは、そうした風景ばかりではなく、この村の人々の生活が自然と密接に関わっており、彼らが自然と対話する術を知っているからに他ならない。

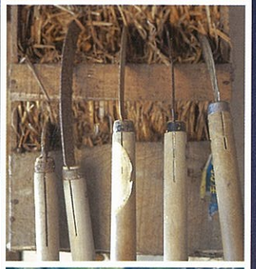
春—この地にいち早く春を告げるこぶしの花が野田平一帯の山肌を白く染める様は、木の精が降り立ったかのように幻想的である。続いて、カラマツや杉の芽吹きが始まり、瑞々しい生命の輝きが村中に溢れる。
夏—藤、つつじ、しゃくやくと花の季節を迎え、村はまぶしい光に満ちる。樹木は枝葉を伸ばして陽射しを余すことなく受けとめ、谷間には清冽な川が流れる。水と緑が最も響きあうとき。
秋—鮮やかな紅葉が渓流に映り込み、針葉樹の深い緑と対峙する。それは比類のない美しさである。
里は実りの季節を迎えた悦びに満ち、天の恵みに感謝する。
冬—夜明け前。天竜川に沿うように川霧がわき上がる。段丘から眺める大地と、それに連なる山並みは、霧の動きにつれ刻々と表情を変え、壮大な光景が広がりを現す。

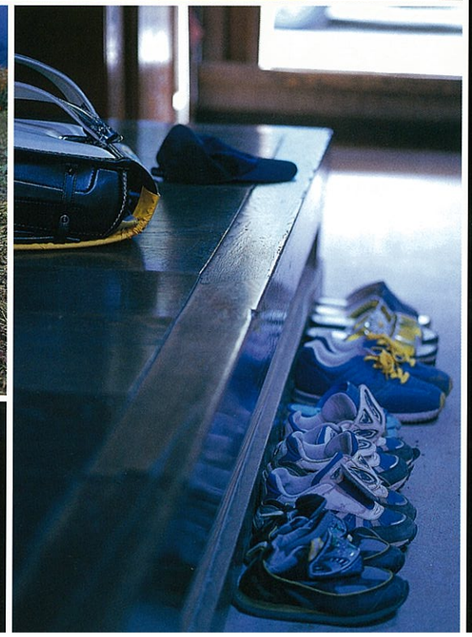
長野県の南部、天竜川が形成した日本一とうたわれる河岸段丘の中心に位置する豊丘村。東は伊那山脈を境に大鹿村、上村、南は壬生沢川をはさんで喬木村、西は天竜川を隔て高森町に接する。東西10.5km・南北7.5km、76.85km²のうち、見事な赤松林を有する森林の面積は75％に及び、段丘中・上段は主に果樹園と野菜畑、最下段には豊かな水田地帯が広がる。

眼下には天竜川が滔々と流れ、西に中央アルプスを望み、東に緑深い伊那山脈が連なり南アルプスへと続く。この起伏に富んだ地形によって、高台から見る村は清々しい緑の光景が折り重なって広がり、平和な空気が流れている。

澄んだ空気のもと、季節の移ろいをその色と匂いに感じ、この地で暮らすことの幸福を思わずにはいられない。
ここは美しき村—NATURE GROUND TOYOOKA
心を澄ますと、大地の声が響いてくる。

1. 湧きあがる雲を山間の水田より望む：堀越・夏
2. 収穫を待つりんご
3. 最盛期を迎えた梨の花つけ：河野新田
4. 初冬の刈田：林原
5. 陽射しを受けて伸びる稲穂：伴野原
6. 新九郎の滝　初秋：下鳥帽子山直下





自然体で暮らすことの
意味が見えてくる…。

豊丘の暮らし

Life style of Toyooka

農家の暮らしに豊丘の歴史を見る

宅地として造成が進む下段地域には新しい住宅が立ち並ぶ。そんな中に、祖先から受け継いだ家を守り、「農」を営む家々がある。豊丘の歴史は言うなれば「農」の歴史でもある。そこには豊丘らしさが凝縮されている。

農家の軒先から裏庭へ回り込んでみる。軒下には柿すだれが並び、納屋には使い込まれた鎌や鍬が置かれ、昔ながらの竹のしょいかご(背負い籠)はいまも大切に使われている。

郷国の趣をそのまま残す土蔵や木の雨戸、風に揺れる大木の枝が土壁に静かに影を落とす。どっしりとしたつくりの家の中、煤で黒く光る柱や梁のひとつ一つが歴史の重みを囁きかけ、一種の風格さえ感じる。

村の歴史の始まりは、一万年以上前の旧石器時代に遡り、縄文時代中期にはすでに人々が暮らし繁栄していたことが、パン状炭化物をはじめとする多くの出土品や遺跡から推察されている。

やがて稲作が始まり、人々が定住生活を営むようになる弥生時代から、徐々に村の輪郭を成しはじめる。

平安時代には、全国に広がっていた荘園の一つに伴野荘の名が記されており、この地が豊かで生産力が高かったことがうかがわれる。その後も知久氏をはじめ、幾多の支配者の重要な拠点として繁栄を続けた歴史の跡が村内に数多く残っている。恵まれた水利と日照、そして河岸段丘が形成した標高差のある地形が稲作を営むに適した風土を育んできたのである。

また、江戸時代には、当時の林村が「お榑木成村」と呼ばれる幕府の直轄地となり、米による年貢のかわりに、豊富な山の木が榑木として納められていた時期があった。榑木は天竜川を下って駿府から江戸・京都・大坂へと運ばれ、建築材や桶材として使われたのである。

一方、その「榑木流し」の舞台となり、豊かな水資源であった天竜川は豪雨の度に幾度となく氾濫し、ことに正徳五年羊満水と近年の昭和三十六年梅雨前線集中豪雨では、歴史を揺るがすほどの甚大な被害をもたらした。この暴れ天竜との闘いが、まさにこの村の歴史でもあった。江戸後期から明治にかけて盛んに行われた堤防築造と新田開発により、美しい水田地帯の基礎が築かれ、村の発展をもたらしたのである。

そして現在、全村にわたり下水道が敷設されるなど、快適な生活環境の整備が進んでいる。これらの事業には、水を守り、活かすといった自然環境への配慮が十分なされているため、ゆかしい家々では、その風格を保ちながら生活の変化を無理なく受け入れてもいる。

村の中を歩いてみる。出会う家ごとにさまざまな表情がある。私たちはそこに、便利さと新しさを追求して止まない現代の風潮に流されることなく、「農」と「家」を守りながら暮らしている人々の、こだわりや思い入れを発見することができる。

過ぎゆく夏、暑さと熱気に包まれた川原で、それぞれの想いを筏に込めて。
その上にある人の心がひとつになった時、自然と共にある自分を素直に受けとめ、喜びを分かち合う。
渡る風と水飛沫の中、感動のステージに引き込まれ、
情熱を力の限り表現する若者たちの姿に、明日への意気を感じる。

Make a plan in the future

次代の村づくり

筏くだり大会にみる 次代を担う青年たちの意気

「エイ、エイ、オー」かけ声が響きわたり、
川原は緊張感と熱気に包まれる。

■筏作り風景

大会数日前。二十代から三十代の青年約二十名で構成される豊丘村商工会青年部の筏作りが、メンバーの自宅を作業場に借り始まっている。夜七時過ぎ、仕事を終えたメンバーが順々にかけつける。

設計図は簡単な手書きのもの。それをもとに、「ここ、止めた方がいいら。…ここだけうまく切って、ちょっとアールをつけて…」とその場で意見を出し合って作り上げていく。会話の間にドリルやグラインダーの音が響く。

「…どう、このくらい？　どんくらいっていったっけ？」

「…だいたい四十五度くらいかな」

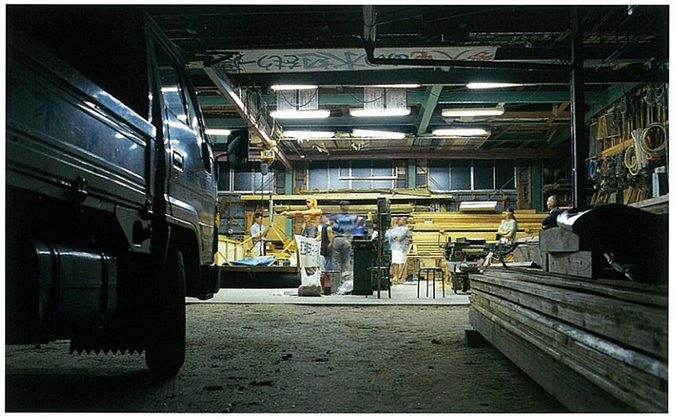
筏の中心にあげる三角の帆をどの角度に、どう取り付けるかひとしきり声が飛び交う。

「いいんじゃない、そのくらいで。それじゃ今度は、人形の向きをどうするかだな」

楽しみながら、なごやかに、それでも真剣に作業が進む。

筏を一から作り上げるには何日もの日数と費用がかかるというが、彼らの筏は第一回大会で作った土台を再利用、毎回の作業は上部のデザインに手を加えて調整するのが主であるという。したがって、制作にあたって、ゴミといえるものはほんのひとにぎりしか出さない。そこが自分たちの自慢（今回のうり）だという。

「チューブだって一回目からのもので、もうパンクは何回もして修理跡だらけですけれどね。でも毎年入賞はしてるんですよ」



豊丘ならやりたい事がきっと見つかる…。

と、思い出がしみ込んだ筏を前にメンバーの一人は言う。

この大会は、速さを競うのではなく、筏の出来映えはもちろんのこと、流れ具合やバランス、チームワークなどが審査の対象になる。そして、第一には川を汚さないということが条件だという。

「河川愛護のために…というテーマもあって、筏には標語を入れて、ベニヤにガムテープを貼ったり、ひもで繋いだり、もしぶつかって折れても川に落ちないようにいろいろ対策はしてあるんです」

とリーダーの大沢さん。大会の精神が、回を重ねるにつれて浸透してきているのがうかがわれる。

仕事柄、全員が集まるのは難しく、筏の制作はできても大会当日に参加できないメンバーもいる。しかし、こうして集まって力を合わせることは、メンバーの交流を深める上で大切な機会になっているという。

ペンキを塗り終わって、ほぼ完成。全員で筏に乗って満足そうな表情。「もしも操縦不能になったら、しゃがんで、ふちにつかまってもらうで、一応テトラポッドにぶつかった時を想定して…。後でコースを見てもらうけど、結構スリルあるでね」

最後にリーダーがみんなの気を引き締める。

■いざ船出―

大会当日、早朝から次々と搬入された筏たちは川原で出発の時を待つ。

いざ船出。豊かな水をたたえた流れにのって、軽快にすべりだしていく。出発点からすぐに速い流れが続き、上がる水しぶきの中、岸へ向かって叫ぶ姿が見る間に遠ざかり、間もなく川筋は大きく右にカーブして、コース第一の難所であるテトラポッドにさしかかる。

筏はまっすぐ進むのが難しい。竹竿を手に、後方での舵取りは必死である。力を結集させて難所をようやく切り抜けると、流れはゆるやかな直線になる。

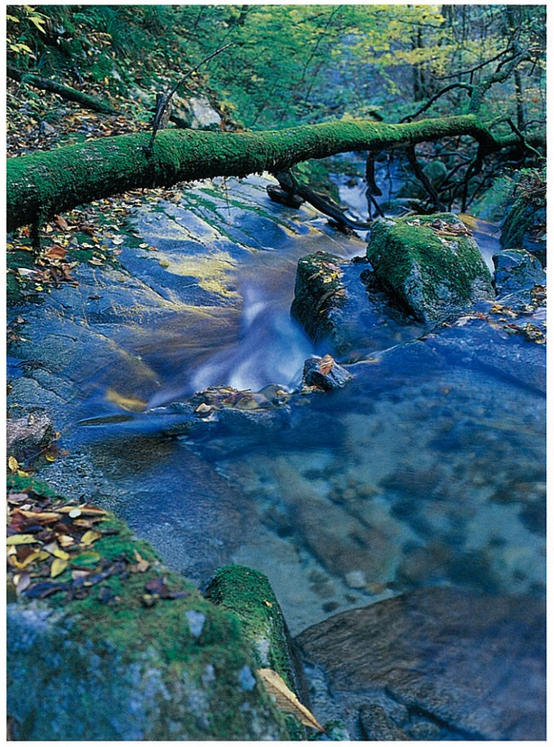
そこがメインスタンド。観客が堤防の上までいっぱいに並び、声援を送る。そして、審査員席の前。しばし、おだやかな流れに筏をまかせ、それぞれ趣向を凝らしたパフォーマンスが展開される。わき上がる歓声と拍手。消防団の放水の中を過ぎると、いよいよ終盤。明神橋を通過して、まもなく一・五キロの航路はゴールを迎える。

カヌーやチューブ下り、ラフティングといった大会が最近各地で盛んに行われているが、豊丘の筏下りは、単にイベントや競技という枠の中にとどまらない。出場するグループは思い思いの筏を手作りする所から始まる。その課程で河川愛護の想いと自然への畏敬の念を新たにする。そして、仲間と協力し、成し遂げることへの喜びを感じるのである。こうして結ばれていく強い絆が、次代の村づくりの礎となっていくのであろう。

ふるさと
豊丘村に寄せる思い

市澤 静山／書家

Thinking of Toyooka



「豊丘のご出身ですか、私は以前豊丘の学校に勤めたことがありますが、よい所ですね、よい思い出が一杯ありますよ、気候がよく、風景もよく、人柄もよく……」。

聞いている私は、このよいの連発が心地よく耳に響き、子供の頃の体験や山川の景色が脳裏に浮かんでくる。そして豊丘村談義がしばし続く。同郷人相手のように親しみを込めて話しているのである。

このような会話を交わすことは、わりあいに多い。教職員の研修会に招かれて行くと、「豊丘村のご出身で……」と紹介されるからであろう。かつて豊丘村にいて、よい印象を受けたからこそ、私への話しかけになるのであろう。吾が事のように嬉しく思うのである。同時に風光明媚なすばらしい故郷を持つ自分を幸せと思うのである。

豊丘の、この地の歴史は古く、旧石器時代からと聞いていた。昨年の暮れ、私は新聞紙上の「豊丘」の文字を目敏く見つけた。旧役場庁舎跡に大規模な集会所が発掘されたとあった。

古代の人々も恵まれた土地を選び、現在とほぼ同じ様な自然環境の中で生活を営んでいたのであろう。清流の中で時には遊び、時には鮮魚を捕り、森林の、竹林の中を走り廻り、山菜や竹の子を採っていたのであろうと想像する。

しかしである。豊丘の名前は私が中学二年の時誕生した。その頃の生活を今と比べれば違いの大きさに驚く。農作業の手伝いで使った道具は、今や資料館でないと見られない。田植作業も過去のことである。テレビ、冷蔵庫が登場し、そして石油が使われるようになり、動力機器がどんどん開発され、自動車も生活に欠かせないものとなっている。

日本全体が経済の高度成長を遂げ、より便利な生活を求めて来たのだ、その結果が環境破壊を生み、今反省を迫られている。

豊丘誕生以来、世の激変にさらされて来た四十余年間であった。豊丘は変わってしまった事は当然のことながらである。だが、自然は昔同様の逞しさを見せてくれているようだ。

二〇〇〇年を迎え、来るべき二十一世紀はどのように変わって行くか想像も出来ない、鳥のように大空を翔んで楽しむ時が来るかもしれない。楽しみや、便利さがよくなっても、真に心を安らいでくれるものは自然であると思う。

豊丘村の未来は、今までのよい事を失うことなく豊かな生活を営む、自然豊かな村として、自然と共存する村、水の流れ、緑の山々、春夏秋冬が心地よく感じられる、自然と生活の響和する村であってほしいと願うのである。

市澤 静山 （本名）市澤 要三

1941年豊丘村河野生まれ、書家。
飯田高等学校を経て東京教育大学へ進む。その後、東京成徳短期大学、女子美術大学、東京教育大学で教鞭を執り、1983年信州大学教育学部に移籍。
現在は信州大学教授、日展会員、読売書法会理事、謙慎書道会理事、書象会副理事長、長野県展審査員を務める。

活力ある産業づくり

Make a plan for vital industry

農

「とよおかの味」、太陽の香りと土の匂いをのせて全国へ。

伊那谷は一年を通じて比較的温暖で、かつ気温の日較差が大きく、降雨量や日照にも恵まれた地域であることから、農業は古くから村の産業の中心であった。

時代の変遷とともに、農業離れや就農者の高齢化が進み、同時に米の生産調整や農作物の輸入自由化といった厳しい道を強いられるが、こうした状況を乗り切ろうと、村では早くから構造改善事業や果樹・畜産団地造成などに積極的に取り組み、水稲・養蚕中心の農業から複合経営への移行をすすめ、市場性の高い果樹や野菜、花卉などの生産拡大に努めてきた。

その成果が着実に現れ、春に小梅、初夏には甘い桃、秋風が立つ頃は「幸水」、「甘世紀」などの梨、晩秋には「市田柿」に加工される柿、そして中でも、りんごはいまや豊丘を代表する果実にまで成長し、「フルーツの里」としての人気は高まっている。そして、平成元年から始まった「りんごの木オーナー制度」や「味体験ツアー」は現代の都会の人々の心を機よくとらえた企画として定着しはじめ、訪れる人は年々増加し、オーナーの契約本数は八五〇本を数えるまでになった。りんご畑が広がる段丘の上は、中央アルプスを望み、天竜の流れと対岸の町村を一望できる秀麗の地で、春のオーナー開村式から九月の収穫祭まで、りんごの実りと同時に豊丘の自然が満喫できるとあって、都会の人々の人気は高まる一方である。嬉しそうに「わが家のりんご」を収穫する親子の姿は農家の人々の励みにもなっている。

また、農業経営の安定や地域の活性化を図ろうと、地元農家の女性を中心に農産物の加工、商品開発の試みも行われている。大地の恵みが新しい「とよおかの味」として生まれ変わり、受け継がれてゆく。こうした、いきいきとした女性の活躍がこの村の農業を支える原動力となっているのである。

これからの時代、農業が迎える状況は厳しいと言われているが、この村を見る限り「二十一世紀は農業の時代」と言える明るい兆しが現れている。農家の人々の技で受け継がれ、育てられてきた豊丘の味覚は、土の匂いと太陽の香りをいっぱいに含んで全国へ届けられていく。

商

交流と商業活動の発信地としての新たな試み。

近隣市町村の郊外に大型店が進出し、古くから地元の生活を支えてきた商店街が存亡の危機を迎えているという状況が昨今際だってきている。豊丘の商店街においても例外ではない。

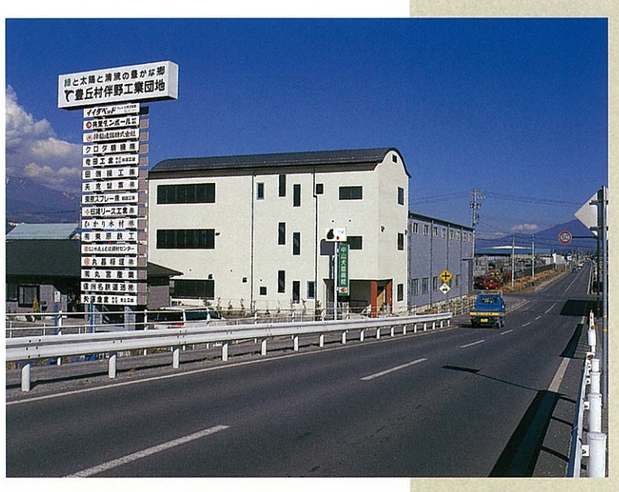
しかし、身近な店を維持することは、地域の活力を育て、高齢者の生活を守ることにもつながるという重要な役割を担っている。そこで、こうした状況を打開すべく、村・商工会・農協が一体となって新たな商業ゾーンが建設された。竜東一貫道路をはさんで役場庁舎の西側に一九九九年十月から営業を開始した共同店舗「ドリームプラザ・たむらんど」である。村内の中学生が命名した「たむらんど」の愛称に地元の人々の願いが込められており、その試みは村内外から注目を集めている。

敷地内には、新鮮で安全な地場の産物をより多くの人により安く提供しようと、農産物直売所コーナーが設けられたJA店舗「ルーラル」を囲んで、農産物加工施設と交流支援センター、そして各種飲食店や薬局などが集結している。

これと相まって、同年九月には村商工会と農協、森林組合共同のプレミアム付き共通商品券を発行した。プレミアム部分は村が補助し、村内の事業所で利用できるというもので、村の商業の活性化の一助ともなればと、こうした試みもスタートしている。

また、村が建設した交流支援センター「だいち」は、りんごのオーナーと中学生体験学習の受け入れや交流の窓口として機能し、農産物加工施設は「豊丘の味」となる特産物開発の拠点となる。いわば、ここは都市と農村の橋渡しであり、消費者と生産者のニーズの接点であり、双方がメリットを分かち合うことのできる場となっている。

ここを発信地として、大都市圏との交流や地域営農・商業活動がますます広がっていくものと期待されている。



工

21世紀へ向けてのテーマは「技術づくり、人づくり、まちづくり」。

産業の中心が農業であったこの村で、工業に本格的に光があてられたのは、高度経済成長期を迎えてからのことである。この時期は農山村から都市への人口の流出が見られ、過疎化が問題となりつつあった時期でもある。

工業立地対策は、若者の定着と安定した職場の提供、所得の向上に伴う地域経済の活性化など重要な役割を担っているため、村では柿外土工業団地や伴野工業団地等の造成を行い、積極的に工場誘致を推進してきた。豊富な水資源と中央道松川インターチェンジから十五分という恵まれた立地を活かして、これらの工業団地を中心に村の工業は飛躍的な発展を遂げてきた。

現在、村内にある企業は四十社余りで、地場産業の半生菓子や漬け物をはじめ、先端技術産業である精密・機械工業の基地として、村のみならず飯伊地域の工業の発展にも大きく貢献しており、着実に豊丘のもう一つの顔となりつつある。

こうした発展を支えてきたものは、人材育成や人材確保などの支援対策に積極的に取り組んできた村の方策と、事業と並行して自然環境の保護や地域社会との交流を大切にしてきた企業の姿勢にあるといえよう。

そしてすでに、二十一世紀へ向けて長期的な展望にたち、環境保護や地域との共生を含めた新たな産業の振興に取り組んでいる。テクノハイランド構想に基づく、伊那テクノバレーの中心地として、「技術づくり、人づくり、まちづくり」をテーマに、活力ある地域づくりを推進することが村と企業の使命といえる。

また、竜東一貫道路開通に代表される交通網の充実は、工業の発展ばかりでなく、観光客の招致、農産物の輸送等を支え、大きな経済効果をもたらすことであろう。

連絡先●堀越区民会館
TEL 0265-35-5256
FAX 0265-35-1053

誇りと喜びづくり

訪れる人々をすっと受け入れ、包み込む山ふところの気取らないもてなし

山の幸、大地の幸、人情の幸…数ある恵みの中で、豊丘が誇る逸品といえば、ここ堀越の松茸である。

秋になると空気が澄んでくるからなのか、こと匂いに敏感になる。香りというものは実に雄弁で、嗅覚を通じて五感を呼び起こす誘惑には抗えない。味覚の秋といわれるこの季節、様々な美味が並ぶ中で、群を抜いて人々を魅了してしまう理由がこの香りなのだろう。秋を盛りの菊の花の香りも「堀越の松茸の香り」には一歩譲らざるを得ない。

「ようこそ堀越松茸観光へ」大きな看板に導かれて道は県道から東へ折れ、山道を登ると区民会館に到着。ひんやりと澄んだ秋の空気が漂う。海抜六六二メートル、天神森林公園のもと、静かな山ふところの集落を見渡す高台にある区民会館は、以前は分校であった懐かしい木の校舎を手入れして利用している。

午後三時、厨房は大忙しだ。揃いのハッピとエプロン姿の地元の人々は、もうすぐ訪れる客人を迎える準備に余念がない。堀越地区の地域おこしを、と始めて二十七年目。毎年、この時季を待ちわびた常連客で会場は賑わいをみせる。豪華なセッティングをされた会場ではないが、そこからは木の温もりとともに地区の人々の思いが伝わってくる。それは、慈しみ育ててきた山の恵みを多くの人々に味わってもらい、山への感謝を共に分かち合いたいという思いの現れである。

料理は地元の人々の手によるもので、とても素朴ではあるが旬の松茸の味を十分に知り尽くしたものだ。ふんだんに盛られたその皿には、思わず溜め息がもれる。「どうぞ、ゆっくりおあがりてくんなんしょ」迎える地元の人々は準備と接待に追われながらも、遠くから足を運んでくれた人々への感謝の気持ちで満たされ、満面の笑顔だ。

商売気のない気取らないもてなしが信条。地元で穫れたりんごもふるまわれ、舞台では地元の奥さんたちの踊りが披露される。「やっぱり、秋にはここの松茸を味わわなきゃね。毎年楽しみにしているんです」そんな声が聞こえる。数年前にはテレビ番組で「堀越の松茸」が全国に紹介されたこともあり、また毎年地元のテレビ局もこぞって、温かいもてなしを取材に来る。

「報道してくれるのはありがたいけれど、有名になりすぎるとお客様が殺到してしまって…、狭い会場だからね…」

と嬉しい悲鳴が出てしまうほどである。村のケーブルテレビも今日のこの盛況ぶりを取材に来ている。今夜にも、会場のもようはケーブルテレビを通じて村内に放送され、人々はそれを見ながら村の誇りを改めて感じるだろう。

観光・開発で自然破壊が進んでいる昨今であるが、この村の財産は、開発至上主義に踊らされることなく、自然を大切に守り続けたことである。

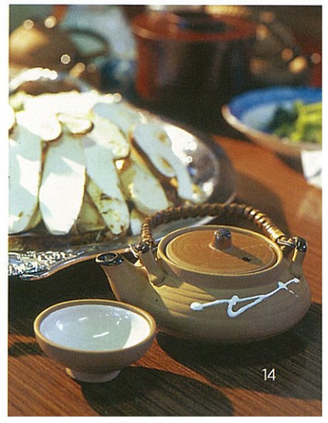
大気と土壌の状態に敏感な松茸は、環境の変化があったり手入れを怠ったりすると正直に反応する。だから春から夏にかけては下草を刈るなど入念に整備して、村の山の多くを占める赤松林を、松茸に好適な土壌に育ててきた。今や伊那谷でも屈指の松茸産地であり、その名は谷を越え、県境を越えて広く知られているが、そうなり得たのは、地元の人々が山への敬意と感謝を忘れないでいるからである。

大勢の人々が訪れた、短くも豊かな松茸のシーズンが終わりを告げる頃、朝晩の冷え込みは一層厳しくなり、間もなく迎える冬への備えが始まる。そして、また来年も、この先ずっと大いなる恵みを与えてくれるよう、山を守り続けていく人たちがいる。

■定番　「松茸ごはん」―香ばしさを味わうなら松茸ごはんが一番。米の一粒ひと粒が松茸の香りと旨みをいっぱいに含んで、お腹も心も満たしてくれる。

この他、「焼き松茸」も味わえる。
大ぶりの松茸の根元に十字に切り込みを入れ、丸のまま網で焼く。松茸の味わい方の醍醐味。程よく焼き色がつき、香ばしい匂いが立ちのぼってきたところを、手で裂いて醤油につけて頂く。

■「土瓶蒸し」―上品な薄味のだし汁に小振りの松茸が丸ごと入って、銀杏と海老が彩りを添える。お猪口に注いだ瞬間にたちのぼる香りは絶品。胸の奥まで沁みわたる。



区民会館の玄関。
昭和42年までは子どもたちの元気な声が響いていた分校の入口

山を慈しむ心が育てた香りの逸品を清涼な空気とともに味わう

「旨い」

その一言に尽きる。

今、採れたての丈大きな松茸ばかりである。松茸の香りや味を市販の松茸ごはんでしか味わったことのない人は、本物の味を知って驚くであろう。「これぞ、マツタケ」と目を見張らせ、五感を震わせる。その味を一度知ってしまったら、もう虜である。

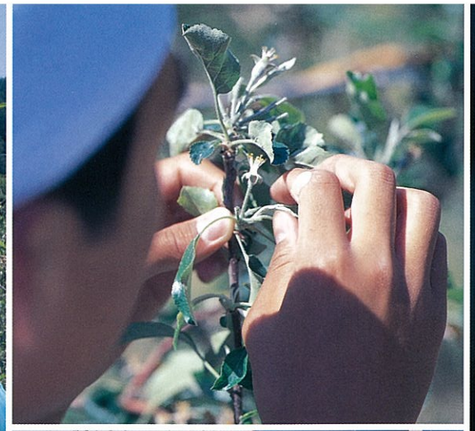
「匂い松茸、味しめじ」と一般には言われているが、採れたての松茸の香り、味、食感たるや、他では決して味わうことができない奥深さである。

■「すき焼き」―白菜、ねぎなど数種の野菜や牛肉とともに、厚めに切った松茸を特製の「割りした」でさっと煮て頂く。シャキシャキとした歯ごたえはこたえられない。松茸の真っ白な断面が湯気の向こうに浮かぶ、柔らかな牛肉もこの時ばかりは主役を譲らざるを得ない。

明日を拓く人づくり

中学生の勤労体験学習から広がる世代と地域を超えた交流

摘花から50日を経て、りんごの実はここまで育った。農家の方から手渡されたりんごを大切に手のひらにのせる。



爽やかな新緑の季節から日に日に濃くなる初夏の日ざしの中、りんご畑に鮮やかなブルーグリーンのトレーナー姿が目立つ。今年も「三中」の生徒がやってきた。

豊丘へ到着した子どもたちはその足で農家へ入り、午後からはみっちり農作業だ。ここ長沢りんご団地の木下延夫さんの畑では八人の男子生徒が摘花に精をだしている。一芽に五〜六輪咲いたものを一輪にするのが摘花作業である。木下さんは中学生の受け入れを始めて今年で十二年目。「やっぱり子どもが好きだもんでなあ。それと富士市との交流を大事にしたいという思いがあって…。毎年子どもがよくやってくれます。今年は、六人のところ八人に増えたんだけれど、八人というのは大変だね。やっぱり家族の協力がなければできんことだな。これからも出来る限りは続けて行きたいと思ってます」

と木下さん。子ども達はその気さくな人柄にすぐにうちとけたようすで、「師匠」と呼んで慕っている。

「男の子ばっかりだったもんでね、まとまりができるか心配だったんですけれども、元気のいい子どもたちで…。お勝手のほうも、味噌汁を作ることからおにぎりまで何でもやってくれて、ほんとに楽しく二日過ぎまして…。もう半日になってなんだか寂しい気がします」

いつも笑顔を絶やさない奥さんの支えと、二人の娘さんの協力は欠かせない。

こうした木下さんのお宅に代表されるような、受け入れ農家の皆さんの温かい心に支えられてきたからこそ、この体験学習が十五年もの間続いたのだろう。

「子どもたちの親がびっくりしますね。普段は全然しゃべらないのに、豊丘から帰ってきて、今日はいろいろあったよって…、お手伝いしたよって…言ってくれたって、喜んで電話をくれるんです。そう聞くとほんとによかったなって思いますね」

こうした話が多くの人から聞かれた。

「人が出会い、人が育つ」ということなのだろうか。年の離れた子どもたちと、最初から話が合うというわけにはいかない。親にしても同様で、無理をしても超えられない年代の壁がある。その間をつなぎ、子どもたちに変化をもたらす鍵はこの自然環境にあるのかも知れない。

豊かな自然の中で共に汗を流し、話す。子どもたちは不思議と心を包み込むような温かい雰囲気に触れ、自分が自分であることの意味に気づいてゆく。一方、大人たちは子どもたちのピュアな感覚に接し、触発される。そして、それは世代を超え、地域を越えた交流につながってきた。

一九九五年富士市で発足した「豊友会」に呼応して、一九九九年六月には「ふじ友の会」が結成される。そして、七月に体験学習十五周年を記念して、受け入れ農家が富士市に招待され、交流会が盛大に催された。農家の方が摘花した実が大きく育ったことを見せたいと、ゴルフボール大の青いりんごの実を持って行き、子どもたちに手渡すと、りんごを手にした子どもたちの顔は感動に溢れる。会場は言葉さえ必要としない温かい雰囲気に包まれていた。

お互いの交流が深まるうちに、豊友会のみなさんは毎年十一月に行われる「とよおかまつり」に自然と参加するようになったという。

テントではトイレットペーパー、お茶、海産物などの特産品を販売し、ステージで余興も披露するという忙しい日程の中、ふじ友の会の方々との交流について座談会という形で話を聞く機会を得た。

「子どもたちだけでなく、親や先生方に学校のあり方とか、子どもの将来を考えるという点でかなり影響を与えているようです。生徒と自分たちの関わり合いというものを強く感じるようなんですよね」

豊友会の太田さんはこう言うが、受け入れ農家の木下さんらには気負いはない。

「春に来たばかりの子どもが家族を連れて来たり、夏休みに遊びに来てくれたり。それから、三中から転任された先生がまたそこの先生にも是非豊丘を見せたいと来てくれたりしてな。ここでの体験を忘れなんでいてくれとることが何よりも嬉しい」と話す。

そんな子どもたちの姿を見ているうちに、摘花作業だけではなく収穫の喜びも味合わせてあげたいと、親子での収穫体験が始まって今年で二年目になるという。

「子どもたちが、豊丘のことを自慢気に話すんだって。そうすると、どういう所か行って見たくなったというのが親心なんだよね。それで、今年来てくれた時に、案内して行ったら『えらい山だ』って…。(笑い)こういう所で作業したのかっていうのを親に見てもらうのもいい事かも知らんな」

と収穫に来た時のことを振り返る会長の田島さん。

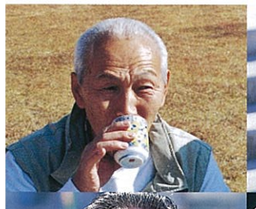
一方、豊友会の会長である望月さんも、忙しい時期に子どもたちがお世話になって、迷惑じゃないかしらと心配していたというが、今ではそんな気づかいは必要ないくらい富士市と三中と豊丘の中には、この交流を大切にしたいという思いが浸透していると語った。

中学生の体験学習が縁で始まった交流がここまで強い絆で結ばれるようになるとは、開始当時、誰が予測しただろうか。

旧知の友のように語り合う富士市と豊丘の方々の表情に、これからもこの交流を大切にしたいという願いと熱意を見ることができる。

「りんご」を通して共有するそれぞれの「穣(みの)り」

Make a plan for Human-resource and Relationship



住みよいむらづくり

……福祉サービスの現場から……

Make a plan for Amenities of village life.

二十一世紀を健康で安心して暮らすために、私たちは今、新たな視点から健康・福祉・生活のあり方を考える時期にある。介護保険制度の導入に伴い、今日ほど住民が福祉に対する関心を寄せている時代はないと言える。

村の福祉の柱には、健康を保つための活動と介護を受けるようになった場合にそれを支える活動とがある。住民課と社会福祉協議会等が密接に連絡をとりあい、現場では保健婦、栄養士、民生委員らが中核となり、ホームヘルパーやボランティアたちがそれを支える。こうした住民の福祉・健康の現場を支えている人たちの活動に焦点をあててみる。

春の彼岸も近い頃、堀越地区のボランティアグループによる昼食会が行われた。七十歳以上のひとり暮らしの方と八十歳以上の方が招待され、六年程前から続いている。昼食会に必要な費用は社会福祉協議会が提供し、ボランティアグループが調理を担当する。この日会場に来られない方にはお弁当にして届けている。村内の各地区でこのような昼食会が行われているが、会場等の都合で食事の用意ができない場合はお茶会という形で交流の場をもっている。

こうした機会には地区の高齢者が集まるので、血圧測定など健康相談も兼ねて保健婦が同席する。この日同席した渡保健婦は血圧測定の間に身体の調子はどうですか、いつもは血圧はどうですか、と話しかける。

「こないだまでは風邪をひいとってな、やっとよくなったんな」

「血圧を毎日気にしとるようじゃいかんけど…、血圧を測っても書いた紙がいつもどっかにいっちゃってな…」

直接顔を合わせて話をすれば、保健婦もその人の健康状態がわかるし、高齢者の側も安心感を得られる。

保健婦はこのような機会を利用しての健康相談や、各家庭へ訪問して血圧測定と健康相談を行ったり、乳幼児検診や小中学校の予防接種などを定期的に行っている。また、PTAや婦人会へ招かれて、健康づくりの講話をすることもある。

渡保健婦は保健婦の職についたのが昨年の春。飯田市出身の彼女はここ豊丘に勤めてよかったと言う。市となると、村と異なり地域が広範囲にわたるため、より密度の高い活動がむずかしい。住民と直接ふれあう仕事であるだけに、より親密な信頼関係は村のほうが築きやすいといえるからだ。その表情にはまだ初々しさが残るが、血圧を測りながらお年寄りの相談に応じる姿は真剣で温かい。

招待された方々が続々と訪れ、部屋の中は話し声や笑い声に包まれる。

「こんないいことしてくれるで、来なけりゃな。わたしは三回目な」

というおばあちゃん。こうした機会があることで、日頃なかなか行き会えない人と顔を合わせ、会話を楽しむことができる。やがて準備が整い、食事が始まる。

今日の献立は、三色おはぎ、とり肉のむし煮、かきたま汁、のりの佃煮の和えものにトマトといちごが添えられている。この献立は三浦栄養士がたて、その指導を受けて十八名ほどの地域の婦人らが調理したものである。和気あいあいと食事をする皆さんの表情から、この昼食会が、招待された方々はもとより、ボランティアの方々にとっても年に一度の楽しみの場であることが伝わってくる。

豊丘村は、近隣町村の中でも高血圧の方が多いというのが三浦栄養士の悩みである。農村では慣れ親しんだ味付けは濃いもので塩分の摂りすぎが大きな原因になっているためだ。できるだけ、塩分を控えても食べやすいように工夫するのが課題である。今日の献立も塩分に配慮し、加えて高齢者に合った食事ということも十分考慮している。たとえば、入れ歯の人には唾液がでるようにある程度は塩分がなくてはならないし、固いものは避けて、食べやすい切り方を工夫するなど。

三浦栄養士は村民全体の栄養指導を受け持っている。デイサービスの献立作りをはじめ、乳幼児検診の際に離乳食の指導や相談、成人病や糖尿病予防の指導、さらに、料理教室を通して栄養指導を行うなど活動の幅は広い。

様々な食品が出回る現代において「食べることが健康の基本である」という原点に立ち返り、健康・栄養教育を充実させる必要がある。それを浸透させるために、シルバークッキングや子どものクッキング教室といった試みをしている。子ども対象ならハンバーガーやピザなどのなるべく身近な食べ物をとり上げ、手作りしてみる。そうすると、市販のものと味や栄養を比較することができる。栄養の話を知識として教えるだけではその大切さはなかなか伝わらないから、実際に作ってみせて食べてもらうことが一番の方法だと三浦栄養士は言う。

こうした活動を通して、生涯を通じた健康づくりの充実を図っている。

平成十一年度開設された介護支援センターで働く壬生保健婦はこの職について十四年めで。在宅介護に関する相談や助言に始まり、要介護老人の把握とサービス、在宅介護センター運営協議会の開催や介護相談協力員との情報交換や連絡調整などの仕事を担当する。

制度のスタートを目前に控え、民生委員に介護保険について説明する機会を持った。社会福祉の推進において重要な役割を担う民生委員の方々は真剣な表情で耳を傾け、説明の間には具体的な質問が間断なく飛び交う。壬生保健婦はその受け答えをし、各地区での説明会には体のあいている限り出かけると熱心に話す。

また、今後は介護の現場を支えるホームヘルパーのニーズが一層増加していくと見られる。

ある一日、ヘルパーに同行する機会を得た。ヘルパーの仕事は、かなり体力と気を遣うのだが、その仕事ぶりは常に明るく、パワフルである。そんなヘルパーの訪問を介護を受ける方々は心待ちにしている。

「お年寄りっていったってパワーはあるんだに。自分たちのパワーをあげて、お年寄りたちのパワーをもらって、お互いに影響しあっているということかな」

そして、一生懸命世話をしてあげると、それは必ず相手にも伝わり、笑顔として返ってくる。

「その笑顔が活力の源です」と言うヘルパーの言葉に、福祉の原点が見える。

村としては、国の介護保険制度と併行して社会福祉協議会と村福祉係とで連係したミニデイ(仮称)などを行う予定である。保健センターや各地区の公民館を利用して従来のデイサービスにかわるものをと考えている。こうした村独自の福祉サービスの充実が今後さらに期待される。

新しい制度のスタートを迎える今…、それによって対応する窓口が変わろうとも、福祉サービスの本質や価値は保ち続け、今までと同様の住民とのふれあいを継続し続けること、そして今後も、社会福祉協議会や各事業所と肩を組んで、住民の福祉・健康に対する支援体制の充実を図ることが村の福祉の在り方といえるのかもしれない。

住民の暮らしに安心と笑顔をたやさない 健康と福祉の充実が21世紀のテーマ

行政サービス

村民と村政をつなぐ窓口は親切な応対を心がけています。また、新庁舎は住民が集い、語らい、ふれあう場として村民ホールや芝生の広場を設け、いつ訪れても優しく迎えてくれる空間となっています。

豊丘CATV

映像コンクールなどで何度も賞に輝いているCATV。村内のイベントや行事の紹介や自主番組制作を通して、地域の人のいきいきとした姿と温もりを伝えています。

消防団活動

分団統合30年の節目を迎え、団員は強い使命感と団結力をもって、村民の生命と財産を守る決意を新たにし、防災の任務にあたっています。防災機能の拠点として、消防センターが庁舎北側に隣接しており、緊急時にも迅速な対応が可能です。

ぴょんぴょん広場

幼児教室やウォーキング教室などを開催し、乳幼児から高齢者まで住民全体の健康を保持・増進するための保健サービスを総合的に行っています。

新世紀に問う：豊かさとは

What is Abundance?… for new Millennium

豊丘村歌

一、山脈たかく　みどり薫りて
朝光きざす　駒ヶ嶺仰ぎ
おどる若鮎　天龍に
映る　わが豊丘　心のふるさと

二、叡知と汗に　いのち覚めて
柿はかがやき　林檎たわわに
みのり豊けし　明日の道
拓く　わが豊丘　潤いのさと

三、継ぎ来し代々の　歴史も永く
たかき文化を　よろこび築く
若きちからのたぎる村
進め　わが豊丘　永遠のふるさと

川中島敏人　作詞
池田　寿一　補作
市瀬　太直　作曲

豊丘村長　吉川達郎

豊かさの定義

今、世紀の節目にあって、我が国全体が大きな転換期を迎えております。

当村にあっても「真の豊かさ」とは何か、「豊丘村」の名にふさわしい、調和のとれたハード・ソフト面を模索していかなければなりません。

こうした中で、村議会を始め村内様々な分野の皆さんからもその実現に向かって前向きな意見が出され、村民参加型村政を大切にしたいと思っております。

三〇〇〇メートル級の南アルプス、中央アルプスを眺めながら、広大な森林、豊かな清流をいつまでも郷里の宝とし、情報通信ネットワークの推進、交通・生活環境整備による安心して生活できる地域づくりの推進、国づくりは人づくりであり、教育を重んじ、文化のかおり高い平和な村づくりの推進、地域の特性や、社会の構造変化に的確に対応し、足腰の強い魅力ある産業の推進等を図りながら、活気に満ちあふれる清潔でうるおいのある地域づくりを願っております。

村民待望のたむらんどの一角に交流センター「だいち」が今年四月オープンしました。そのセンターを拠点として、本冊子が、豊丘村生活の顔として、外への発信となり、交流の糧となることを念じ、発刊にあたってのご挨拶といたします。

豊丘村●2000年・村勢要覧
平成12年4月発行
長野県下伊那郡豊丘村
tel 0265-35-3311／fax 0265-35-9065
E-mail : toyooka@iidanet.co.jp
企画／豊丘村役場総務課
●本要覧の制作にあたり、多くの方々にご協力をいただきました。ここに深く感謝いたします。

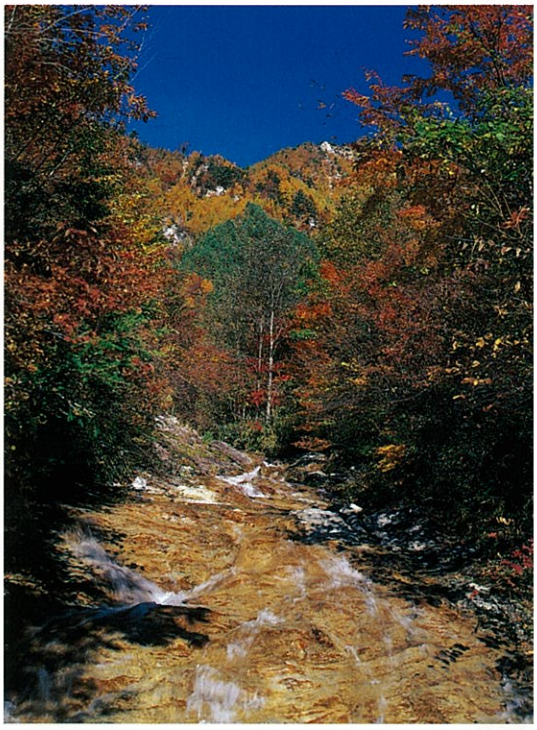
制作・編集／株式会社ジャステック
-STAFF-
Planning & Direction : Takashi Imaizumi
Art Direction & Design : Satoru Miyauchi
Copywrite : Hiroko Kinoshita
Editrial Design : Takashi Hara
Photograph : Masafumi Matsuzawa
: Masaki Shimizu
Special Photograph : Naoyuki Shiroshita
Coordinate : Atsushi Kinoshita

野田平「こぶしの群生地」

表紙題字：市澤静山

豊丘讃歌

豊かなる
四季
光る丘



村花「こぶし」

村木「赤松」

豊丘村●2000年・村勢要覧